

審査の結果の要旨

氏名 小野間亮子

本論文は、世紀末ウィーンを代表する詩人であり、その後の多方面にわたる活動によって20世紀ドイツ語圏文学に大きな足跡を残したH.v.ホーフマンスタール(1874-1929)の文学を、その核をなす言語によって捉えられない<何か>—未完の長編小説『アンドレーアス』の一節を手掛かりに、それを作中事物に特定可能と捉えられた「中心点」とは区別して<中心>と呼ぶ—をめぐり絶えざる表現の試みとして読み解き、緻密な作品分析を通じて、その文学活動全体を貫くダイナミズムを明らかにしようとした労作である。

創作メールヒェンの分析においては、作品を貫く美学的原理としての「アラベスク」が、関係の錯綜と変容のなかで全体に統一をあたえるべき「中心点」を空位のままにすることで、完結を志向しながらも内的な運動に開かれた形式を実現していることが明らかにされる(第1章)。続いて『アンドレーアス』草稿群が分析の対象となる。これまでは、ある安定した図式をもとに草稿群を再構成するか、逆に完全な断片の集積とみなすかという対立する読みが主導的であったが、主人公の予感にとどまる「中心点」と彷徨という運動性に注目した論者は、作品性と断片性を総合する新たな読みの可能性を提示している(第2章)。意識的に断片が集積されたアフォーリズム集『友の書』の読解においても、現前する断片を通して暗示され、また断片相互の連関を生み出すものとしても措定される現前せざる<全体性>が、確定されざる<中心>として機能していると、断片・アフォーリズム形式についての研究の蓄積を踏まえ説得的に論じられている。講演「国民の精神的空間としての著作」における「精神的空間」をこうした<中心>との関連において論じることは、ホーフマンスタールにおける「保守革命」の位置づけに新たな視点を提供する(第3章)。「新しい古代の創造」としての神話の取り扱いの分析では、統一の成就という見かけの背後に存続し続ける相克の契機と、成就そのものを<相反するものの相互変換>として表現する点が強調され、18世紀末以来さまざまに追求されてきた「新しい神話」構想におけるホーフマンスタールの独自の位置が、彼の創作全体のダイナミズムとの関連において明確にされている(第4章)。最終章では長編小説の試みへ立ち戻り、最晩年に至るまで、統合の試みと解体・断片化の運動が持続していたことが、従来あまり注目されることのなかった最後期断片群の読解を通して明らかにされ、論全体は閉じられる。

ホーフマンスタール研究の蓄積を十分に踏まえ、<中心>への注目によってその多様な活動における試みの一貫性を浮かび上がらせつつ、個々の作品解釈においてもさまざまな新たな視点を提供している本論文であるが、分析の対象としたテキストの選択と配列に関して、方法論的により踏み込んだ議論が望まれる。また、いっそう厳密な規定を要する概念が散見されるとともに、細部の解釈に関してもさらなる展開の余地がある。しかし全体としては、本論は独創性ある論考として高く評価しうるものである。よって、本審査委員会は本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績であるとの結論に至った。